

被災地での宿泊研修—東松島市・石巻市での交流活動

東松島市周辺被災地や旧門脇小学校訪問、
宮城県石巻西高等学校の生徒とのグループワーク等

東松島市周辺被災地（旧野蒜小学校、旧野蒜駅舎）や旧門脇小学校訪問、避難場所となった日和山公園、鹿島御児神社への避難経路の確認、旧大川小学校訪での献花、宮城県石巻西高等学校の生徒とのグループワーク等を行いました（Aグループ5班）。

東松島市周辺被災地 旧野蒜小学校→旧野蒜駅舎等



まずは、津波による甚大な被害を受けた旧野蒜小学校前で、奥松島観光ガイド 三浦 利子さんと合流しました。バスの中から旧校舎や体育館跡などを見学しながら、避難所に指定されていた野蒜小にも津波が押し寄せ、体育館に避難していた多くの方が亡くなった痛ましい事実などについてお話を伺いました。

その後、JR 旧野蒜駅に移動し、バスを下車。震災遺構として保存されるプラットフォームを見学後、現在は震災の様子や復興の歩みを伝える施設となった旧駅舎で、展示写真を見ながら被災当時の状況について学びました。



三浦さんは「本当に大事なものは自分の命。持ち物ではない。災害が起きたときは物を取りに戻らず早く避難をしてください。」と強く語り掛け、参加者も真剣な目でその言葉を受け止めていました。



旧門脇小学校→避難場所となった日和山公園→鹿島御児神社



旧門脇小学校では、事前研修でも講師を務めていただいた同校の校長であった鈴木 洋子先生の案内で、震災当日、同校児童たちが駆け上がった校舎裏手の日和山・鹿島御児神社までの避難経路を、実際に走って上るという体験をしました。

鈴木先生からは、学校に避難してきた住民らを校舎二階から脱出させ一緒に日和山へ登ったことなどもお話し頂き、津波に対しては「より上に」逃げることの大切さを現場で実感しました。



日和山は標高約 60m。実際に坂道を駆け上がった参加者たちはその長い道のりに息を切らせながら、互いに協力してこの道を走って避難した当時の小学生たちの行動に思いを馳せました。そして、最終的に児童らが保護者と合流したという頂上奥の鹿島御児神社に参拝。同じ頂上でも、より海から離れた社が最終避難場所であったことを確認しました。

旧大川小学校



児童・教員ら 80 人以上が死亡・行方不明となった旧大川小学校を訪問。班のリーダーが慰霊碑に献花し、全員で黙祷を捧げました。参加者は大きく破壊された校舎を無言で見詰めたり、静かにカメラで記録したりと、それぞれが地震・津波の恐ろしさ、命の尊さと向き合いました。

宮城県石巻西高等学校の生徒とのグループワーク

宮城県石巻西高等学校(以下「石巻西高校」という。)では、はじめに伊藤 俊校長から講演していただきました。講演では、校舎が避難所、体育館が遺体安置所となった震災直後の過酷な状況、「この経験を伝えたい」との思いからこれまで計15回行った他校との防災交流、津波到達地点に石を置いて「命の道しるべ」とする生徒たちの自発的な取組など、困難を乗り越えて前向きに進む震災後5年間の石巻西高校の活動について伺いました。



続いて、石巻西高校の生徒と合同で「なますの学校」という防災カードゲームを使ったグループワークを行いました。「地震でたんすが倒れ、人が下敷きになった。助け出すにはどの道具を使えばよいか。」といった問題に対し、グループで話し合いながら適切と思う道具のカードを選び、その理由を発表。身近な道具をいかに活用するか、普段から何を備えておけばよいかを学びました。

進行を務めた石巻西高校の今泉 まいあさんによると、「なますの学校」は同校の生徒全員が防災授業の一環で行うゲームとのこと。参加生徒は、自分たちの防災意識はまだまだ足りないことが分かったなどと感想を語りました。

被災地での宿泊研修

東松島・石巻グループの参加者感想

旧東松島市立 野蒜小学校等訪問	周りを見渡すと住宅や建物が少なく、田舎だからかと最初は思っていたが、「元はたくさんの住宅が並んでいたが、津波によって流されてしまった」と、語り部さんから話を聞き、改めて津波の恐ろしさを知った。	生徒
	震災前に、地元の方が退職金をつぎ込んで、家の裏山に避難所をたった一人で作ったとのこと。作っている最中は「こんなとこまで津波が来るわけないべ」と近所の人々からバカにされ、笑われていたそう。しかし実際に震災が起きると、この避難所が70人の命を救ったといえます。目指すべきはこれだなと思いました。	教員
旧石巻市立 門脇小学校訪問	被災した人たちと同じように門脇小からずっと走って、第1、第2、第3避難場所へと行ったが、大変な体力を消耗するものだと分かった。当日は雨も降っていたのでなおさら大変だったが、震災当時のことを考えるとそうでもなかった。雪が降り積もる中の大地震。上級生が下級生の腕を引き、下級生たちはお年寄りの手を引く。そうやって育っていったのだと考え、周りとの関わりがいかにか大事なのか、日頃の訓練の意味を考えさせられる。	生徒
	門脇小は、高台まで一番近い立地にあるとは思っていたが、あの距離の、しかも坂道を駆け上がって、命を守った小学生のすごさを学んだ。	生徒
	実際に、当時の避難経路を走って、高台まで駆け上がるという体験をした。私たち高校生でも大変なのに、小学生が走ったと思うと、すごいことだと思った。	生徒
	実際に、山に登り避難する体験をさせてもらった。見学するだけでなく、自分の体を使い動くことで、より現実に即した感覚を身に付けることができると感じた。山というと、大雨や地震によるがけ崩れも想定する必要がある。すると、その場合の対処の仕方は全く異なるものになる。現状にあわせ、臨機応変に対応することが求められるので、様々な場合の判断や対処の仕方を（生徒に）想像させることも必要であると感じた。旅行で沿岸部にいる場合もあるので、実際に登る体験しておくことは、今後役に立つと感じた。	教員
宮城県石巻西 高等学校交流活動	最も印象に残ったのは、生徒さんたちのほじけるような笑顔だった。一人一人が抱えている事情は様々だと思うが、前向きに強く生きているように感じた。同学年の子と話をするのは本当に楽しかったし、もっと多くのことを語りたかった。	生徒
	私たちは、自分の生まれ育った町、大切な人を失うという喪失を体験したわけではないけれど、日々当たり前前の生活に感謝することができる。当たり前にある町、当たり前で過ごしている家族・友だち、当たり前前に食べている食事。その全てが当たり前ではないということ。このことを覚えて生活していく必要がある。石巻西のみんなは一人一人がとても輝いていた。未来に対する希望、地元愛が強い。些細なことへの気配りがすごい。私たち都立高校生は、石巻西高校から学ぶべきことがたくさんある。	生徒
	校長先生が「風化はすでに始まっている」とおっしゃっているのを聞いて、怖くなった。“被災地”という遠い存在のような気がしてしまうけど、実際に現地の人の話を聞いてみると、防災に対する意識や同じことを繰り返さないための知恵などはどれも大切なものばかりで、「遠い」だなんて思っていた自分にも怖くなった。判断力、日頃からの意識、訓練、過去の教訓、人々の協力が大切だと改めて学んだ。	生徒
旧石巻市立大川小 学校献花・訪問	実際に津波に飲まれてしまった校舎を見て、校舎も壊してしまうほど津波の力はすさまじいものだったんだと感じた。門脇小から高台への避難ルートを体験したことも合わせ、今日1日で、自分の命を守る大切さを学んだ。1分でも1秒でも早く、迷っている暇など1秒も作らず、すぐに高台に避難する大切さを強く感じた。	生徒
	亡くなられた教員は、津波が迫った時に身を挺して生徒を守ろうとしたと聞く。しかし生徒のほとんどは津波の犠牲となった。その一方でもしもに備え避難先を教員で協議して変更し、生徒を無事に避難させた学校もある。災害が起きてからでは、たとえ自分の命を投げ打っても誰かを救うことはできない。それほどの熱意があるなら、それを平時の「防災」にそそぐことが、生徒はもちろん教員、学校、ひいては地域を守ることにつながるのではないかと。	教員

被災地での宿泊研修—多賀城市での交流活動

多賀城市内の視察、
宮城県多賀城高等学校の生徒とのグループワーク等

多賀城市内において、多賀城公園野球場仮設住宅、鶴ヶ谷地区災害公営住宅の視察や、イオン多賀城店、市内浸水域視察、末の松山等を巡る多賀城「まち歩き」、宮城県多賀城高等学校の生徒とのグループワーク等を行いました（Bグループ5班）。

多賀城市内視察 多賀城公園野球場仮設住宅→鶴ヶ谷地区災害公営住宅



まず訪れたのは、プレハブの応急仮設住宅。多賀城公園野球場内に建てられているため、周囲には球場のライトが立ち並びます。平成28年7月に全ての入居者が転居したため、現在、162戸の住宅に居住者はいませんが、多賀城復興支えあいセンターの齋藤 博さんの案内により、当時の避難生活に思いをはせながら、住宅内を見学しました。多くの生徒が「想像よりきれいだが狭く、4人以上の家族で、ここで長期間暮らし続けるのは大変だったろう」と感想をもらいました。



次に向かったのは、平成28年3月に完成したばかりの鶴ヶ谷地区災害公営住宅。ここでは多賀城市役所 地域コミュニティ課の瀧口主幹より、多賀城市の市民が提供した震災に関する写真や映像をまとめた「たがじょう見聞憶（<http://tagajo.irides.tohoku.ac.jp/>）」を紹介頂き、震災を風化させない取組について学びました。

また公営住宅に居住する方々が孤立することなく、コミュニティを円滑に運営していくための自治会の方々の工夫や努力について、入居者自治会の齋藤耕之助会長と、地域ぐるみの交流イベントを企画・運営した梶原正弘さんに教えていただきました。人と人とのつながりが、真の復興の第一歩であることを学ぶ時間となりました。



多賀城「まち歩き」 イオン多賀城店→市内浸水域→末の松山→多賀城駅



宮城県多賀城高等学校の小野先生、原田先生の御案内により、グループに1つ支給されたタブレットを活用して、被災当時の映像等を確認しながら、多賀城市内の「まち歩き」をしました。イオン多賀城店の屋上では、津波が襲ってきた当時の映像を見ながら、現在の町の様子を確認。多賀城市特有ともいえる、海側と逆方向から津波が襲ってくる、「都市型津波」の怖さを実感する体験でした。



多賀城市内には、あちこちの電柱に、被災当時の津波の高さを示す標識が掛けられています。震災を風化させず、未来に生かすため、多賀城高校の生徒が中心となって取り組んだものです。

最後に、小倉百人一首にも詠まれ、“津波がここまではこない”と伝え続けられた小高い丘にある「末の松山」を訪れました。東日本大震災の時も、地元の方々はその言い伝えを信じて、この丘まで駆け上がったというお話を伺い、伝え続けることの重要性を学びました。

宮城県多賀城高等学校の生徒とのグループワーク

防災の専門学科としては全国で2校目となる「災害科学科（平成28年度新設）」がある多賀城高等学校では、小泉博校長をはじめとする先生方及び同校生徒会執行部の協力を得て、交流を深めました。合同防災キャンプ2016の参加生徒と、多賀城高等学校の生徒の混成グループを作り、各グループで「72時間をどう生き延びるか」「身近な危険」といった課題を基に、対応方法等を話し合いました。その中で、東日本大震災当時は小学生であった多賀城高等学校の生徒の、当時の被災体験や学校での取組を聞くこともできました。



宮城県多賀城高等学校 小泉 博校長



合同防災キャンプ2016参加生徒の一人は、グループワークで印象深かったことについて、次のように述べています。

「地震が起きた時を想定して案を出し合う中、印象的だったのは、“一人にならないでみんなで逃げる”という意見です。これは多賀城高校の方が述べたもの。その方は『東日本大震災の後、コミュニケーション不足で気がめいってしまった人を多く見た。みんなで助け合うことが大事だと思った。』と話してくれました。震災のことを覚えてはいますが、実際に経験したわけではないので、同年代の子の意見や話を聞けるのはとても貴重でした。」とのこと。この貴重な体験談を基に、「自分たちも今後を想定し、減らせるリスクは減らすことの重要性を学ぶことができた。」と交流活動の意義を述べていました。

被災地での宿泊研修

多賀城グループの参加者感想

多賀城公園野球場仮設住宅	仮設住宅はテレビでしか見たことがなかった。実際に見ると、意外と狭いと感じた。私が今、普通に住めていること（暮らしていること）が改めて幸せなことなのだと痛感した。	生徒
	もう住民は引っ越してしまった仮設住宅。今もまだ取り壊すことが決まっていないと聞いた。部屋は一人暮らしならいいかもしれないが、家族で暮らすには狭い部屋だった。	生徒
	仮設住宅がある野球場までは坂道で、お年寄りや小さい子は大変だなと思った。住宅内は狭く、不便に感じた。ここで4～6人家族で暮らすのはストレスもたまるし、すごく生活しづらいと思った。	生徒
鶴ヶ谷地区災害公営住宅	災害公営住宅で居住者が孤立せず、またよりよく暮らしていくには、自治会の立ち上げが大切。リーダーシップを取れる人物をいかにして見出すかが重要である。	教員
多賀城市内「まち歩き」	イオン屋上の駐車場で、渡されたタブレットで津波のときの映像を見た。逃げ遅れた人たちが津波に流されていく様子はつらく、自分や自分の周囲の人たちはそうさせないようにしたい。	生徒
	イオン屋上の駐車場で聞いた、「海と反対の方角から津波が来た」という話が印象深い。話を聞いて、ただただ、怖いと感じた。	生徒
	イオン屋上の駐車場からタブレットで、津波に襲われた当時の映像と現在の街並みを見比べた。東日本大震災で唯一、都市型津波が来た多賀城市の映像を見る経験ができて良かった。なぜなら東京で大きな水害が起きた時、おそらく四方八方から水が押し寄せ、単純に海・川から遠い方へ、低い場所から高い場所へ避難すれば良いというわけではないからだ。	教員
多賀城高等学校交流活動	多賀城の高校生の話を聞いて一番印象に残っているのは、「マニュアル通りにはいかない」という言葉だ。災害時にはいつも以上に一人一人が物事を考えることが大切だと分かった。	生徒
	震災発生当時、家に帰れず学校に残った人たちと、校内で1日過ごした話等を聞き、当時の不安な気持ちが痛切に伝わってきた。緊急時、何日間か家に帰ることができない事態に直面した時のため、家族との連絡手段をしっかりと決めておくことの重要性を改めて感じた。	生徒
	多賀城高校の生徒の皆さんは、気さくで明るくとても話しやすい方々だった。5年前に東日本大震災を実際に経験した人たちには見えないほどでした。話し合いのテーマはグループで好きな場所を決め、そこで地震が起きたらどうなるかを話し合うもの。その中で、被災中、火があるのとないのとではまったく状況が変わること、水が使えないので皿にラップをしいて使ったことなど、私たちが被災したときに使える術も聞くことができた。	生徒
	グループワークでは「72時間をどう生き延びるか」について。どのような危険があり、どのような行動をとるべきかを話し合った。発災直後だったり、発災から数時間経った時等とでは、すべきことが異なり、時と場合に応じた冷静な判断が必要であると思った。多賀城高校の皆さんは、実際に震災を経験しているので、話す内容に説得力があった。自分はまだ、意識が低いというか、考えが甘いと思った。	生徒
	多賀城高校では、生徒を育てる姿勢に感銘を受けた。兵庫にある防災科を設置している学校では行政に携わる人間を育てようとしているが、多賀城高校では上級学校へ進学させたいという思いもある。それは、消防士や役人への就職の受け皿がないからだ。地域の実態に合わせ、将来の見通しを持った教育をしている多賀城高校に刺激を受けた一日であった。	教員
	多賀城高校の避難訓練について。マニュアルに頼らず、臨機応変な対応ができるような訓練を行っていた。災害時は反射的に行動できなくてはならない。時間が経過すればマニュアルに従えばいい。本校も前任校でも、避難訓練はいかにマニュアル通りに行くかが重視され、事前の会議で「この場合どうするか」と絞り出すように計画を立てているが、災害についての素人がいかに知恵を出し合っても完璧になどなるわけがない。もっと多面的な事柄への対応力が要求されると実感した。	教員